

## (138) ブールデル美術館

6月に入ってパリは夏日が続いている。フランスも異常気象や温暖化現象が顕著で日向は30°Cを超え、早くも日焼け対策が必要だ。ブローニュの森にある全仏オープン会場ロラン・ガロスの準々決勝「ジョコビッチ対カチャノフ戦」を観に行ったが日差しが強くて途中でスタンドを出た。今年の夏はフランスも猛暑の予報で水不足、山火事、熱中症が今から心配されている。

湿気を帯びた熱気を避けて「ブールデル美術館」の中庭で静かなひと時を過ごした。コロナ禍とリニューアル改装で長く閉館していたが一般公開が再開された。モンパルナスタワーから歩いて5分、大通りの喧騒から離れた静かな通りにある。ブールデルがアトリエ兼住まいとして住んでいたところで、現在は彫刻家にちなんで「アントワヌ・ブールデル通り」(18 Rue Antoine Bourdelle 75015 Paris)と改名されている。レンガの外壁に囲まれて、3つの中庭に配されたブロンズ像群がアジサイの白い花に彩られて心を癒される。

オーギュスト・ロダン(1840-1917)、アリスティッド・マイヨル(1861-1944)と同時代の彫刻家アントワヌ・ブールデル(1861-1929)はトゥールーズから50km程北に位置するモントーバンで生まれる。15歳で奨学金を得てトゥールーズの美術学校に進む。1884年パリのボザールに合格し、1885年から現在美術館になっている場所(当時はメーヌ袋小路 (Impasse de Maine)に住み、生涯この地で創作活動を続ける。

「弓を引くヘラクレス」  
(最初のスタディー1906-1909年)

翌年1886年にはモントーバンの両親も呼び寄せている。1893年から1908年までの15年間はパリ近郊の町ムードンにあるロダンのアトリエでロダンの大理石像を完成させて収入を得ていた。オーギュスト・ロダンという巨木の陰で終わりたくなかったブールデルは経済的な余裕ができるとロダンから離れ、それと同時にブールデルの新しい彫刻の道が開ける。

「弓を引くヘラクレス」(1910年頃)がブールデルを世に知らしめることにな



る。「弓を引くヘラクレス」が誕生する20世紀初頭は、芸術史上新たな動きが現れる。アフリカ文明やオセアニア圏文明のプリミティブなエネルギーに創作の源を求め、ギリシャ・ローマ神話へ回帰する芸術運動である。1906年から何度もスタディーを繰り返し、弓を持たないヴァージョンや頭の形を変えつつ作品が完成されていく。1911年のサロンに出展されたブロンズ「弓を引くヘラクレス」は弓を引く瞬間の空間構成と力強さ、緊張感において衝撃を与え、新たな芸術を開く作品として絶賛を博す。50歳にしてようやく訪れた名声である。

「瀕死のケンタウロス」(石膏)



上半身が人で下半身が馬というギリシャ神話を題材にした「瀕死のケンタウロス」(1911-1914年)は、ロダンの「三つの影」のように極端に曲がった首が死の劇的な瞬間を表表現している。

モンターバン市の発注で「闘う人々」(1870-1871年晋仏戦争で亡くなった兵士に捧げる記念像)(1902年)、そして1910年からはパリ・シャンゼリゼ劇場のための制作が始まる。コンクリート建築の父オーギュスト・ペレ(1874-1954)が設計し、ナビ派の巨匠モーリス・ドゥニ

(1870-1943)が天井画を描き、ブールデルが正面壁を大きな大理石のレリーフで飾るという傑作である。

1911年から1926年は大きな作品の注文が続き「奉納の聖母」(1919-1922)、「フランス」(1923-1925)、アルゼンチン共和国建国の父「アルヴェアル将軍(1788-1852)の記念像」(1913-1923年)とその台座の四角に置かれたブロンズ像「力」「勝利」「自由」「雄弁」(1918-1922)は4mに近い大きさと力強く、まっすぐに遠くを見る凛とした眼差しは神々しく、まるで仏像を見ているようでもある。

世界中からの注文を受け、創作に追われるブールデルのアトリエには世界中から弟子たちが集まった。イタリア人アルベルト・ジャコメッティ(1861-1944)、フランス人女性ジェルメヌ・リシエ(1902-1959)、日本人清水多嘉示(しみずたかし)、モダン芸術を世界に広める彫刻家たちを育てたのである。(古賀順子記)

